

# Bhutan

【ブータン】

写真・文＝関 健作(カメラマン)

祈りと自然と  
今を生きる

A. 明かりが少なく、空が澄み切っているため夜空には星がくっきりと見える  
 B. 口笛の音が辺りに響く。農民は口笛で風を呼び、風の力を使ってコメともみ殻を振り分ける  
 C. タシヤンツェにある仏塔チヨルテンコラ。ブータン人は仏塔を信仰の対象とし、時計回りに歩きながら祈る



A



C



B



田植えが終わるころ、田んぼが空の色を映し出す湖になる

「オンマニベメフム」  
 チベット仏教、祈りのマントラがどこからともなく聞こえてくる。タシヤンツェは首都ティンブプーから車で2日、ブータンのもっとも東にある県だ。到着するとすぐに目に飛び込んでくるのがブータン最大級の仏塔、チヨルテンコラ。熱心な仏教徒であるブータン人にとって、仏塔は心の支えである。毎日子どもからお年寄りまでこの場所を訪れ、祈りをする人が絶えない。

5月、タシヤンツェではコメ作りが始まる。ここに住むほとんどの人が農民であり、シーズンになると皆が協力して田起こしが始まる。一列に並んで歌を歌いながら同時に鋤を振り下ろす。彼らの姿はまるでダンスをしているように見える。  
 「農作業は皆でやるものだよ。なぜ助け合うかって？ 何の見返りも期待しないでやってみな、気持ちいいから」。彼らの言葉には重みがあった。ブータンの人々は家でも学校でも日々チベット仏教の教えを実践している。10月になると稲刈りが始まる。タシヤンツェではすべてが手作業だ。稲を岩にたたきつけ脱穀。午後になると風が出てくるので、それを利用してコメともみ殻を振り分ける。精米も臼ときねで行う。すべてが人力であり、地道な作業が朝から晩まで続く。一見大変そうに見えるが、彼らの顔は生き生きとしている。その後のご飯と地酒は最高にうまいそうだ。彼らはこんなことを話した。「来るものは拒まず、去るものは追わない。あるがまま受け入れるんだ」。



力を合わせて田起こし。歌を歌い、ダンスをしているかのよう



収穫期が近づくと野原にコスモスが咲き乱れる



首都：ティンブー  
 面積：約3万8,394km<sup>2</sup>（九州とほぼ同じ大きさ）  
 人口：約68万人（2009年）  
 公用語：ゾンカ語など  
 宗教：チベット系仏教、ヒンドゥー教など  
 1人当たり国民総所得（GNI）：2,020ドル（2009年）  
 経路：日本からの直行便はなく、タイやインド各都市、バングラデシュなどでの乗り継ぎが一般的。  
 通貨：ニュルタム（BTN） 1BTN=約1.8円（2011年7月現在）  
 気候：ヒマラヤ山脈の中心に位置し、氷河を擁する標高の高い北部から、インド国境に近い温暖な南部まで、地域によって気候はさまざま。日本と同様に四季がある。



毎日仏塔の周りで祈る80歳の男性。彼の目は少年のようにキラキラしていた



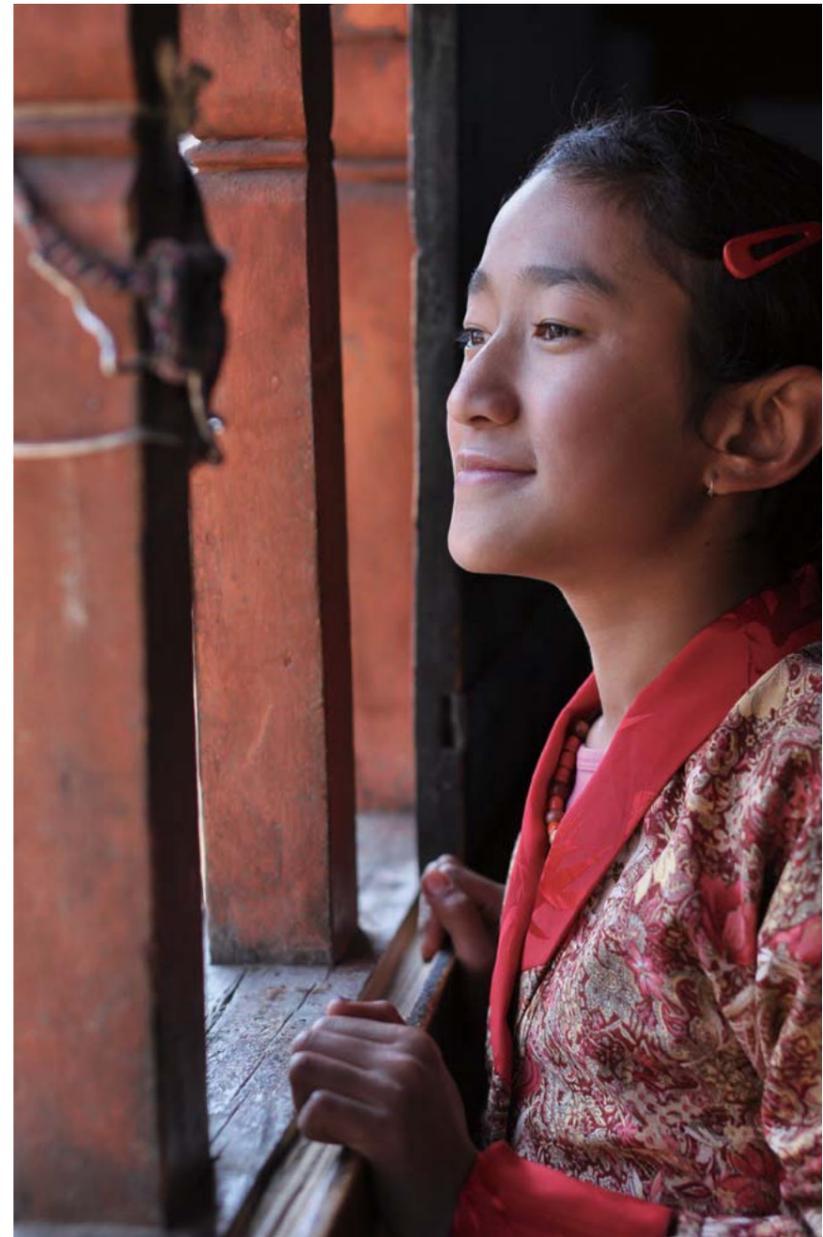
D



E

D.チベットからの訪問者。冬になると田んぼに残ったコメを食べに飛来し、越冬する  
 E.農作業をする親たちの横で遊ぶ子どもたち。彼らは何をやっても楽しそうにしている  
 F.窓から外の様子を見つめる農家の少女。曇りのない真っすぐな瞳

F



### ブータン料理 ジャガイモのチーズ煮込み 「ケワダチ」



「世界一辛い」ことで有名なブータン料理は、どのメニューにも必ずといっていいほど、大量のトウガラシが使われている。日本で売られているものよりも辛みが強いが、地元の人たちは野菜と同じ感覚で生のまま食べることも。血の巡りを良くし、体を温める効果のあるトウガラシは、標高が高く、特に冬の寒さが厳しいヒマラヤに暮らすブータンの人々にとっては、欠かせない食材なのだ。

家庭でよく食べられているのは、豚肉の脂身をトウガラシやダイコンと煮込んだ料理「バクシャバー」、タマネギにショウガ、トウガラシ、チーズなどを混ぜ合わせたサラダ「エゼ」など。どちらも大量のトウガラシのほか、塩、油、チーズなどをたっぷり使うのが特徴だ。

中でも煮込み料理の「ケワダチ」は、ブータン国民が大好きな家庭料理。地元の言葉ゾンカ語で「ケワ」はジャガイモ、「ダチ」はチーズを意味する。トウガラシの辛さにジャガイモとチーズの甘みがマッチした、シチューとグラタンの中間のような料理だ。エマ（トウガラシ）とダチを煮込んだ「エマダチ」が一般的だが、子どもがいる家庭では辛味を抑えたこの「ケワダチ」がよく食べられている。辛いのが苦手な人はトウガラシの量を調節してぜひ一度お試しを。



ブータンには10センチほどの大きさになるトウガラシもある

**【材料（4人前）】**  
 ジャガイモ大4個／トマト1個／タマネギ1個／トウガラシ20本（お好みで。タカの爪とシシトウを各10本ずつでもOK）／ニンニク50g／プロセスチーズ300g／塩小さじ3杯／油大さじ3杯／水100～150ml

**【作り方】**  
 1. ジャガイモは一口大の厚さ5ミリ幅にスライス、タマネギは薄切り、トマトは乱切り、ニンニクはみじん切り、トウガラシは縦に4分の1等分にする。プロセスチーズは固まらないように細かくほぐす。  
 2. 1と水、塩、油を鍋に入れ、ふたをして10分ほど煮込む。  
 3. ひと煮立ちしたら焦げつかないように中火にする。  
 4. 水分がとび、ジャガイモが軟らかくなったら火を止め、さっとかき混ぜて出来上がり。

☆醤油やコショウをかけてもおいしい。

編集協力：太田幸輔（青年海外協力隊OB／ブータン／体育）

荒っぽい作業の後にはたくさんのコメが田んぼに残る。冬になるとチベットからオグロ鶴が飛来し、余ったコメを餌にする。毎年多くの鶴が田んぼに集まり、甲高い声が町中に響き渡る。「トウントウンカルマ（鶴）がやってきた」。鶴の姿が見えると子どもたちは大はしゃぎである。農民たちは鶴が飛来するこのタシヤンツェをこよなく愛している。「どこにも行きたくない。ここが一番好きだ」。農民の多くが胸を張って語ってくれた。

毎日お祈りをする80歳の男性がこんなことを言っていた。  
 「昔は忙しくて祈る時間がなかったが、今はいくらでも祈ることができる。魂を磨く時間がある。こんなに幸せな時間はない。今が一番いいね」  
 ここに住む人の多くは、真っすぐでやわらかい瞳をしている。過去の思い出や、未来への不安に振り回されることなく、今を楽しんでいるように見えた。祈りと自然と共に、彼らは今を生きている。

# 「国民総幸福量」に基づいた 国づくり・人づくりを

伝統や文化を大切に守りながら、開発を進めるブータン。技術協力や円借款、無償資金協力などを通じて、JICAはハードとソフト両面から人々の「幸福度」を高めるための支援を行っている。



【上】送電線や変圧器を人の手で運んでいく。ヒマラヤ山系に属するブータンの農村部は険しく、車両が入れない場所も多い  
【下】農村部に電気が通ったことで、夜でも子どもが勉強したり、大人が内職できるようにになった



地方行政官の能力向上は喫緊の課題。日本人専門家(左奥)は現場に足しげく通い、信頼関係を築いた上で、開発計画の立案・策定などの支援を行う

国の経済力を示す「国内総生産(GDP)」だけに偏らず、国民がどれだけ幸せかを示す「国民総幸福量(GNH)」を重視するブータン。近年、このユニークな発想で、日本でも広く知られるようになってきた。興味深いのは、実際にGNHの理念を念頭に国の政策がつくられている点だ。経済発展を否定するわけではなく、生活水準を上げるためにはモノもおカネも必要であることは認識している。ただ、急激な近代化はせずに、自国の文化や伝統を守りながら開発を進めていく考えなのだ。2008年に作られた第10次5カ年計画では、貧困削減に向けて「農村開発」「戦略的インフラ整備の拡大」「グッドガバナンス」など5分野の開発目標を掲げている。JICAは、その計画に沿って農業・農村開発、経済基盤整備、ガバナンスの3分野に重点を置き支援を行っている。

農業分野の支援の始まりは、まだ日本とブータンに国交がなかった1964年にさかのぼる。海外技術協力事業団(現JICA)から農業専門家として西岡京治氏が派遣され、コメや野菜作りのノウハウを伝えた。現在、ブータン西部は穀倉地帯となり、その後“ブータン農業の父”と呼ばれた西岡氏をはじめとする日本人専門家によるおかげで、地元でも喜ばれている。

最近では、「東部2県農業生産技術開発・普及支援計画プロジェクト」(2004～09年)を実施。貧困層が多い東部地域で農業技術の普及に力を入れている。さらに2010年に「園芸作物研究開発・普及支援プロジェクト」を開始し、園芸作物の商業化を支援。モデル郡に日本人専門家を派遣し、地元農家による換金作物のカキ、モモ、ナシといった果物の栽培にも挑戦し、地元のマーケットに売るシステムも整えることで、人々の生計向上を目指している。

また、農業の機械化も支援。長年、無償資金協力で供与してきたハンドトラクターは、面積の小さな棚田がほとんどのブータンでは、小回りが利くと重宝されている。このハード面の支援に合わせ、ソフト面の技術協力として、「農業機械強化プロジェクト」も実施。国内4カ所に農業機械化センターを設置し、ハンドトラクターなどの農業機械が故障した際の修理、使い方の研修、スペア部品の販売などができるような体制の整備を支援してきた。

一方、インフラ分野では、円借款で農村部に配電網を整備している。ブータンでは豊富な水資源と高低差を利用した水力発電が主流で、電力の大半をインドに輸出し、国家歳入の約4割をまかなっている。しかし急峻

な地形とインフラの未整備で首都近辺以外は配電網の整備がなかなか進んでおらず、農村部の電化率は54%(08年)にとどまっている。そこでJICAは、配電線や変圧器などを新設し、同じくブータンで電化事業を行っているアジア開発銀行やオーストリアとともに、国内の100%電化を目指している。加えて、技術協力で「地方電化促進プロジェクト」も実施し、ブータン電力公社へ配電網の敷設方法、メンテナンス方法、太陽光発電の取り付け方法などの技術指導を行っている。

また、ガバナンス分野では、04年から「地方行政支援プロジェクト」を実施し、2011年からフェーズ3が始まっている。08年に初の国会議員選挙が実施されて民主化されたブータン。地方分権化が進められ、地方の開発を担う県・地区レベルの開発議会も設置されたが、民主化以前は中央主導の政治体制だったため、自分たちで開発計画を立てるノウハウを持っていない。そこで地方人材の養成を目的に05年に導入された「総合人材育成計画」に基づき、県や地区の行政官を対象とした研修を開始。また、住民のニーズを取り入れた地域開発計画の策定方法や効果的な地方交付金の使い方などを指導し、地方の行政能力強化を支援している。



【左】無償資金協力で供与されたハンドトラクターを修理中。長く使用できるよう、技術協力で修理の仕方などを指導  
【右】養分を効率よく行き渡らせ高品質の果実を作るため、成長の過程で間引く「摘果技術」を地元の人々に教える日本人専門家(右)